

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第559号 平成25年6月13日

くちづけ

映画「くちづけ」は、知的障がい者のグループホームを舞台に仲間達との暖かな交流と障がいを持った娘を愛するが故に苦悩する父親の姿を描いたドラマです。

このドラマの結末は、とても「悲しい」ものです。この「悲しい」という意味は、娘を心から愛しているにもかかわらず、愛する故に自分の手につけざるを得ない父親の苦悩や、苦境にあった父と娘を助ける事が出来なかった、2人を取り巻く人々の無力感であり、娘の死を理解する事ができないグループホームの仲間達の際限のない心の優しさといって良いでしょう。

「くちづけ」というドラマは、映画の「うーやん」役で出演している宅間孝行氏の脚本により、2010年に彼の主催する劇団「東京セレソソデラックス」で上演された作品を映画化したもので、監督は、「金田一少年の事件簿」等を手掛けている堤幸彦氏です。

さて、ドラマのあらすじですが、知的障がい者の自立を支援するグループホーム「ひまわり荘」では、仲間たちの静かで、暖かな生活が繰り広げられていますが、そこに元は有名な漫画家だった「愛情いっぽん」が、娘の「マコ」を連れて住み込みで働く事になります。

「マコ」は、かつて若い男に連れ去られるという恐ろしい目にあった事があり、それがトラウマとなって、知らない男性と一緒にいる事が出来ません。この為、これまで施設で生活する事が出来なかったのですが、「ひまわり荘」では仲間と直ぐに打ち解け、落ち着いた日々を送れるようになります。

「ひまわり荘」は、医師の「国松先生」が病院の収入を充てて運営しているのですが、経営は非常に厳しい状況に置かれています。

やがて、「ひまわり荘」は経営難に追い込まれ、閉鎖される事になります。丁度その頃、「愛情いっぽん」は癌に侵され、進行する癌と密かに戦っていたのですが、「ひまわり荘」の閉鎖という事態の中で彼は追い詰められ、愛する娘の行く末を思い苦悩を深



「くちづけ」公式サイトから転用しました。

めて行きます。しかし、彼を取り巻く人々は誰も、彼が癌に侵され、余命いくばくもない事を知りませんでした。

「愛情いっぱい」は、遂に「マコ」を施設に入れる決意をするのですが、「マコ」は度々施設から脱走を繰り返し、「愛情いっぱい」と暮らしたいと訴えます。進退窮まった「愛情いっぱい」は「マコ」に「ごめんな、弱っちいお父さんで。」「マコ、いっぼんの娘でいてくれて、ありがとうな」と語り掛け、最後におでこにくちづけをした後、彼女の首を両手で締め上げてしまいます。

このドラマでは、障がい者を巡る様々な厳しい現実を我々に突き付けています。

「ひまわり荘」は、入居者が自分の障がい者年金の中から家賃を負担する事になっているのですが、入居者の1人「島ちゃん」の両親は息子の年金を着服しながら「ひまわり荘」の家賃を1年以上も滞納しており、「国村先生」を悩ませています。こうした無責任な親が存在する現実、更には、我が子の養育を放棄し、虐待している親が少なくない事も、我々はしっかり認識しておく必要があります。

グループホームの見学に来た「国村先生」の娘の同級生は、「ひまわり荘」の入居者に対して「キモイ」といい、心無い態度を取ります。また、「うーやん」の妹は、兄が障がい者である事を理由に婚約が破断となってしまいます。こうした障がい者やその家族に対する偏見は、残念な事に、今も世間には蔓延していますし、こうした偏見が障がい者の自立を妨げているといっても過言ではありません。

私には、「くちづけ」という映画は、障がいを持った娘とその父親の愛情物語というより、むしろ「障がい者の自立」がテーマであるように見えます。

「障がい者の自立」と口ではいいますが、それは決して簡単ではありません。

「自立」というのは、「自分で自分の行為を規制する事」「外部からの制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動する事」とされていますが（広辞苑）、こうした考えに立てば、必ず誰か彼かの支援を必要とする障がい者には自立は難しい事になってしまいます。

しかし考えて見ると、健常者といえども、誰の助けも借りずに一人で生活している人はいない筈です。今は元気で何不自由なく暮らしている人でも、年を取って来ると一人での外出はおろか買い物も難しくなります。そうした中でも、自分の足りざるところを手助けしてもらえれば自立した生活ができるというケースは多い筈です。そしてこれは、障がい者の方々にとっても同じだと思います。不自由な部分に対して適切な支援を受ける事で自立した生活が可能となる障がい者の方々は、まだまだ沢山いらっしゃる事でしょう。

もう一つ「くちづけ」を見て感じた事があります。それは、この映画の主人公である障がい児の娘と父親の有り様についてです。

父親の娘を思う気持ちは痛いほど伝わって来ますし、その思いが強い余り、自分

が元気な内は自分で我が子の面倒を見ると考えている親は、「愛情いっぽん」に限りません。

「この子を一人では残せない」、「最後の最後まで面倒を見続けたい。一緒に暮らしたい。」そうした親子の絆の強さ、親としての責任感の強さは私にも良く理解できます。しかし、一般的に親の方が先に死ぬ事を考えると、例えばグループホームやケアホームへの体験入所等を行いながら、1日でも早く自立が可能となるように、子どもを親元から離して行く努力も必要ではないかと考えています。

どうする事が子供の将来にとって最善の道なのか、親の悩みは尽きないと思いますが、障がい者のみならず、その保護者を含め支援して行くのも、自立支援施設を運営する方々の大きな役割だと思っています。

私は「くちづけ」を見ながら、障がい者の自立支援に係わる者の1人として、障がいのある人やその家族の方々と寄り添いながら、彼らが1人で苦しみや悲しみを抱え込む事の無い様、なお一層の努力が必要だと、改めて感じているところです。

(塾頭：吉田 洋一)